

2025 年度中央大学共同プロジェクト 研究実績報告書

1. 概要

研究代表者		所属機関	文学部	2025 年度助成額	
		氏名	首藤 明和	2,988,000 円	
		NAME	SHUTO Toshikazu		
研究 課題名	和 文	中国「一带一路」事業下の中国雲南・カザフスタン・ラオスの〈意識・身体・社会〉の変化・再編と〈共生の作法〉に関する実証的研究		研究 期間	2025～2027 年度
	英 文	An empirical study on the restructuring of "consciousness, body, and society" and "practices of symbiosis" in Yunnan, Kazakhstan, and Laos: Focusing on the impact of China's Belt and Road Initiative.			

2. 研究組織

※所属機関・部局・職名は 2026 年 3 月 31 日時点のものです。

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	首藤 明和	中央大学・文学部・教授	全体統括	
2	天田 城介	中央大学・文学部・教授	死生観研究	
3	矢野 善郎	中央大学・文学部・教授	宗教社会学史研究	
4	山田 昌弘	中央大学・文学部・教授	国際結婚研究	
5	野宮 大志郎	中央大学・名誉教授	研究統括（カザフスタン）	
6	高井 康弘	大谷大学・名誉教授	研究統括（ラオス）	
7	王 維	長崎大学・多文化社会学部・教授	移動（華人・中国系）研究	
合計 7 名				

3. 2025年度の研究活動報告 ※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

(和文)

はじめに、中国「一帯一路」事業下の中国雲南・カザフスタン・ラオスの〈意識・身体・社会〉の変化・再編と〈共生の作法〉に関する研究について、2025年度の研究活動を総括しておきたい。とりわけ、研究組織チームによる共同研究が、当初計画通りに進捗しなかったことを、真摯に反省しなければならない。

第一に、研究全体を統括する研究代表者は、現地調査から収集した大量の一次資料の整理と分析で十分な時間を割くことができなかった。このことが原因で、研究組織の各メンバーによるデータ分析が妨げられてしまった。たとえば、地域や家族が執り行う祭祀や儀礼、あるいは家族親族の婚姻観やその実態に関するインタビューデータは、平均2時間、40名ほどのインタビューを通じて収集した。しかしこれら音声データは、ラオス語や各エスニック・グループの言語、あるいは雲南少数民族の話す雲南語などであるため、インタビューを文字に起こす作業は難航した。このため、研究分担者による死生観、宗教信仰、国際結婚等に関するデータ分析は未着手のままになった。

第二に、現地に関する文字資料の収集も順調に進んだが、それらは、アラビア語、ラオス語、フランス語などで記された歴史的記述が中心であり、現地に関する情報がほとんどないなか、ハイコンテクスチュアルな内容を読解するのに多大な時間を要している。このことが原因で、たとえば学史研究などの文献研究でも、当初予定していた研究は未着手のままになった。

第三に、研究組織メンバーにおいて、体調不良による手術・入院や、家族の不幸、介護など、相次いでのおっぴきな事象が生じたことも、当初の共同研究を推し進めることを困難にしたことは否めない。

本研究の目的である〈共生の作法〉の解明に関して、各調査地から得られた知見の比較研究は今後の課題である。とりわけ共同研究において、その成果が形となるまでには一定の時間を要することは明らかなので、こうした課題にも対応をした上で、今後、研究代表者としての責任を果たしていきたい。

一方、確かに研究成果には制約や限界があるものの、それでもなお、学術的な意義をもつと考えられる、いくつかの貴重な知見も得られた。以下、2025年度の研究成果を、各地域にまとめて報告しておく。

中国雲南省保山の回族ムスリム研究から得られた知見

雲南省保山市の調査では回族ムスリムを対象とした研究を進めている。フィールドワークによるインタビュー調査を2009年から今日まで継続して取り組んできた。

回族は、歴史的にも現代的にも、非対称的な関係にある〈他者〉——皇帝、国家、政府、漢族など——との共生を迫られる状況にあった。たとえば〈他者〉を記述する際、語彙やトピック、語り方での〈適切さ〉が求められてきた。そのなかで回族が選択した、皇帝(国家)とアッラーへの「二元忠貞」の二重信仰体系は、イスラームを信仰するなかで、その専門知と語彙をもって、中国を観察し記述することを可能にしてきた。二元忠貞の論理的絶対矛盾こそは、むしろ宗教的に有意味な区別として作動し、対立と紛争によって自らの生存や尊厳が損なわれることを回避してゆく。

調査地・保山の回族の〈共生の作法〉では、信仰に支えられた生活が〈持続〉してゆく可能性を、明清四大イスラーム漢文訳著家のひとりに数えられる馬注思想(馬注:1640-1711、保山出身)の提示による〈合意の先取り〉によって確かなものにしようとする。ここでは、自己と他者のあいだで〈合意〉が実際に成立するかどうかは特段重要ではない。むしろ中国という世界のなかで、信仰を表明し証明しつづけることの〈持続〉が重要である。

宗教は、それ独自の複雑性のさまざまな記述を産出して、これと結びついたリアリティの構

築を守ろうとする。そもそも、環境からの途方もなく増大した複雑性の圧力のもとにあつて、宗教は、宗教のなかで「最小多様度」（環境の複雑性に対応できるだけの多様性を宗教自身が持つこと）を調達することはできない。だからこそ宗教は、この不可能性そのものを観察して、自身の機能との深刻なコンフリクトを回避するために、宗教の環境不適合性について、宗教自らが説明する。その説明こそが、馬注の編み出した二元忠貞のような〈中国イスラーム思想〉であり、回族の〈共生の作法〉に横たわるロジックである。

ラオス・ウドムサイ県ナーモー郡のフィールドワークから得られた知見

調査地ラオス北部のウドムサイ県は、面積 15,370 km²、人口 307,622 人、人口密度 20 人/km²、県庁所在地はサイである。県内 85% が山地で、北側の県境では、中国雲南省シブソンパンナー・タイ族自治州と約 15 km 国境を接している。1975 年にラオス人民民主共和国が誕生、社会主義計画経済期を経て、80 年代後半に市場経済化政策に転じ、90 年代以降は経済各部門の民営化や幹線道路の整備が進んだ。2000 年代になると、市場経済化の浸透が急速に進んだ。2000 年代前半には、サイは、中国国境（ボーテン、メオチャイ）、タイ国境（ボケーオ）、ベトナム国境（ディエンビエン）、そして首都ビエンチャンを結ぶ、北部物流の要地に変貌した。また、農村部の幹線道路やその支道沿いでは、周辺の農山村から人びとが多数移住し、集住地区が現れた。さらに、パラゴムノキや換金作物の導入が進んだ。焼畑耕作と休閑地での有用植物採集、家畜の野放しに象徴される、かつての半自給的な「生業複合」の暮らしは大きく変貌してきた。

2021 年 12 月にラオス中国鉄道が開通した。ビエンチャンからバンビエン、ポーンホーン、ルアンパバーン、サイ、ナーモー、ナートゥーイを経て、中国国境ボーテンから雲南昆明へ至る。ラオス中部・北部の物流のメイン・ルートを縦貫する路線には、ナーモー駅も設置された。

かつてナーモー郡の住民のほとんどは、半自給自足の小農民であった。周辺山間部から幹線道路沿いへの移住が進み、集住地区が現れると、農業の傍ら、さまざまな農外就労で現金収入を獲得する機会を持つようになった。エスニシティ帰属において同質的な生活世界で大半を過ごす人びとは、教育や医療、通婚やビジネスを通じて減少し、むしろ他の村や集住地区の人びと、他のエスニシティ帰属の人びととの交流機会が増えている。

階層分化やエスニシティの帰属意識の変容を経験するなか、ラオスの人びとの社会関係は大きく再編されつつある。とりわけ〈中国語圏〉拡大の影響は、集住地区／近郊農村／遠隔山村で、それぞれに特徴的な現象をともしつつ、ラオス社会全体の社会関係再編を進めている。

ナーモーの集住地区は、ホームサイ、フアイオーン、ナムセー、ナートーンの 4 か村から構成される。郡役所はホームサイ村にあり、郡で最大規模の常設市場はフアイオーン村にある。幹線道路（国道 13 号北線）沿いや、フアイオーン市場で店舗を構える比較的裕福な商人にはラオス籍漢人のホーが多い。ホーが手続き代行業や結婚相手紹介所などを経営して、中国籍漢人ニューカマーへの通訳や運転手の紹介、仕事の斡旋、結婚相手の紹介、滞在資格や住宅・土地購入の手続き代行などをおこなっている。ナーモー郡で、ホーがもっとも多いのはホームサイ村であるように、集住地区の住民は、拡大する〈中国語圏〉の重要な結節点となっている。

また、近郊農村や遠隔山村にて、パラゴムノキで採取された生ゴムや、乾季を中心に栽培される換金作物は、そのほとんどが中国系企業や商人によって買い取られ、中国に輸出される。

換金作物栽培では、中国の農業企業や中国人農業経営者が、村人へ地代を払って農地を借り、かつ、村人を農業労働者として雇用するケースが多い。

ナーモー郡では、〈中国語圏〉が現金収入、教育、留学、結婚など、新たな情報や機会をもたらしている。それら情報や機会は、その多寡や精粗で人びとのあいだで差があるものの、集住地区、近郊農村、遠隔山村の空間を超えて、人びとの関係のなかに存在している。それはあたかも、〈つながりの全体性〉の更新を、ナーモーの社会に促しているかのようである。〈中国語圏〉の拡大と浸透は、もはや中国語ができる／できないといった言語コマンドの次元を超えており、むしろ人びとの意識、身体、社会に密接に作用している。

カザフスタンのフィールドワークから得られた知見

カザフスタン研究では、中国の「一帯一路」政策が関係諸国のローカル・コミュニティ、家族、個人にもたらす影響について、多角的視点からの分析を試みている。とくにこの1、2年の調査では、都市建設労働者へのインタビューから、中国や中国人労働者のプレゼンスが、カザフスタン人労働者に与えている影響を分析した。具体的には、一定数の中国人が経営のトップにあり、かつ中国人労働者が働くカザフスタン都市建設関連企業に焦点をあて、そこで働くカザフスタン人労働者に対してインタビュー調査をおこなった。得られた知見は以下のものである。

第1に、インタビューしたカザフスタン人都市建設労働者は、それぞれの労働チーム内で中国人労働者の同僚としての仕事の経験と人間関係をもっている。このことが、現在の彼らの中国・中国人観を大きく規定している。彼らは、国内での中国人に対するネガティブな感情があることに言及しながらも、中国から送られてくる資材や製品が良質のものであることを強調するなど、むしろ中国・中国人へのポジティブな感情が比較的強いことが明らかである。

第2に、中国人に対して何ら特別視することなく、労働機会を求めてウズベキスタンやタジキスタンなど、他の国からカザフスタンに来る労働者と同じように捉える視点である。職場での経験に言及しつつ、対中国・中国人観を、中国人以外の外国人労働者と比較して捉えている。

第3に、政治に対する興味が薄い、あるいは政治的な事柄にさほど関心を持たない人たちの対中国・中国人観である。中国による「一帯一路」政策については、「聞いたことがある」という程度の理解であったり、ホルゴス自由交易区については、家族など身近な者が仲買人として中国製品を購入する場所といった程度の認識であったりする。また、中国文化への興味、さらには子息が中国にて高等教育を受けることに対する肯定的な態度を表明したりしている。

カザフスタン社会では、たとえば農村部・鉱物資源採掘労働者と都市部・建設労働者などで中国・中国人観の相異は明らかである。その多様さと要因を、今後の調査で確認していく。

(英文)

To begin with, I would like to summarize the research activities conducted in fiscal year 2025 for our study on the transformations and reconfigurations of consciousness, body, and society as well as the practices of symbiosis in Yunnan (China), Kazakhstan, and Laos under China's "Belt and Road Initiative." In particular, we must sincerely reflect on the fact that the collaborative research undertaken by our organizational team did not progress as originally planned.

First, the principal investigator, who oversees the entire project, was unable to devote sufficient time to organizing and analyzing the large volume of primary materials collected through fieldwork. As a result, the data analysis by other members of the research team was hindered. For example, interview data concerning rituals and ceremonies conducted by local communities and families, as well as views and actual practices related to marriage among families and kinship groups, were collected through approximately forty interviews, each lasting about two hours. However, because these audio recordings were in Lao, various ethnic minority languages, or Yunnan dialects spoken by minority groups in Yunnan, the transcription process proved extremely difficult. Consequently, analyses by co-researchers on topics such as views on life and death, religious beliefs, and international marriage remained uninitiated.

Second, although the collection of written materials related to the field sites progressed smoothly, many of these documents consisted of historical accounts written in Arabic, Lao, or French. Given the scarcity of available information on the local contexts, deciphering such

highly contextualized content has required considerable time. As a result, literature-based studies—such as those planned in the history of scholarship—also remained unstated.

Third, it is undeniable that a series of unavoidable circumstances among the research team members—such as surgeries and hospitalizations due to health issues, bereavements in their families, and caregiving responsibilities—made it difficult to advance the collaborative research as initially planned.

Regarding the elucidation of the practices of symbiosis, which constitute the central objective of this study, comparative analysis of the findings obtained from each field site remains a task for the future. It is clear that collaborative research requires a certain amount of time before its outcome can take shape, and with this in mind, I intend to fulfill my responsibilities as the principal investigator while addressing these challenges.

At the same time, although the research outcome inevitably contains constraints and limitations, we nonetheless obtained several valuable insights that can be considered academically significant. Below, I present a summary of the research outcome for fiscal year 2025, organized by region.

Insights gained from research on Hui Muslims in Baoshan, Yunnan Province, China

In research conducted in Baoshan City, Yunnan Province, we are advancing studies targeting Hui Muslims. Fieldwork-based interviews have been continuously conducted from 2009 to the present.

Historically and currently, the Hui people have been forced to be symbiosis with "others"—emperors, states, governments, Han Chinese, etc.—in an asymmetrical relationship. For example, when describing "others," "appropriateness" in vocabulary, topics, and narrative style has been required. Within this context, the dual faith system of "dual loyalty" to the emperor (state) and Allah, chosen by the Hui people, has enabled them to observe and describe China with their specialized knowledge and vocabulary while practicing Islam. The logical absolute contradiction of dual loyalty actually functions as a religiously meaningful distinction, preventing their survival and dignity from being undermined by conflict and disputes.

In the study of the Hui people's "practices of symbiosis" in Baoshan, the possibility of a life supported by faith being "sustainable" is sought to be solidified through the "pre-emptive agreement" presented by the thought of Ma Zhu (1640-1711, born in Baoshan), one of the four great translators of Islamic texts into Chinese during the Ming and Qing dynasties. Here, whether or not "agreement" is actually established between oneself and others is not particularly important. Rather, what is important is the "sustainability" of expressing and demonstrating faith within the world of China.

Religion produces various descriptions of its own complexity and attempts to protect the construction of a reality associated with it. Fundamentally, under the immense pressure of increased complexity from the environment, religion cannot procure "minimum diversity"—religion possessing enough diversity to cope with the complexity of the environment—within itself. Therefore, religion observes this impossibility itself and, in order to avoid a serious conflict with its own function, explains its own environmental incompatibility. This explanation is Ma Zhu's devised dual loyalty and "Chinese Islamic thought." It is the logic underlying the Hui people's "practices of symbiosis."

Insights gained from fieldwork in Na Mo District, Oudomxay Province, Laos

Oudomxay Province in northern Laos has an area of 15,370 km², a population of 307,622, and a population density of 20 people/km². Its capital is Xay. 85% of the province is mountainous, and it shares a border of approximately 15 km with the Sip Song Phangna Dai Autonomous Prefecture in Yunnan Province, China, to the north. The Lao People's Democratic Republic was established in 1975, and after a period of socialist planned economy, it shifted to market economy policies in the late 1980s. From the 1990s onward, privatization of various economic sectors and development of major roads progressed. In the 2000s, the penetration of market economy policies accelerated rapidly. In the early 2000s, Xay transformed into a key hub for northern logistics, connecting the borders with China (Boten, Meo Chai), Thailand (Bokeo), Vietnam (Dien Bien), and the capital Vientiane. Furthermore, along main roads and their branches in rural areas, large numbers of people migrated from surrounding farming and mountain villages, resulting in the emergence of concentrated settlements. In addition, the introduction of rubber trees and cash crops progressed. The former semi-subsistence "complex livelihood" lifestyle, symbolized by slash-and-burn agriculture, the collection of useful plants on fallow land, and the roaming of livestock, underwent a dramatic transformation.

The Laos-China Railway opened in December 2021. It runs from Vientiane through Vang Vieng, Phong Hong, Luang Prabang, Sai, Na Mo, and Na Toui, to Boten on the Chinese border and then to Kunming in Yunnan. Na Mo Station was also established on this line, which traverses the main logistics route in central and northern Laos.

Previously, most residents of Na Mo district were semi-subsistence small farmers. As migration from the surrounding mountainous areas to the main roads progressed and settlement areas emerged, they gained opportunities to earn cash income through various non-agricultural jobs alongside agriculture. The number of people who spend most of their time in a homogeneous world in terms of ethnic identity has decreased through education, healthcare, intermarriage, and business, while opportunities for interaction with people from other villages and settlement areas, and with people of other ethnic affiliations, have increased.

Amidst stratification and shifts in ethnic identity, the social relationships of the Lao people are undergoing a significant restructuring. In particular, the expansion of the "the Chinese language bloc" is driving a reorganization of social relations throughout Laos, accompanied by distinctive phenomena in concentrated settlement areas, suburban farming villages, and remote mountain villages.

The Na Mo settlement area consists of four villages: Hom Xai, Huai On, Nam Xe, and Na Thong. The district office is located in Hom Xai village, and the largest permanent market in the district is in Huai On village. Many of the relatively wealthy merchants who have shops along the main road (National Highway 13 North) and in the Huai On market are Lao nationality of Han Chinese descent. This ethnic group called the Ho operate agencies and marriage agencies, providing services such as interpreting, driver placement, job placement, marriage introductions, and assistance with residency permits and housing/land purchase procedures for newcomers of Chinese nationality of Han Chinese. In Na Mo district, the village with the largest concentration of the Ho people is Hom Xai village, and the residents of these concentrated settlements are important hubs in the expanding "the Chinese language bloc."

Furthermore, in nearby rural areas and remote mountain villages, raw rubber harvested

from rubber trees and cash crops cultivated primarily during the dry season are almost entirely purchased by Chinese companies and merchants and exported to China. In cash crop cultivation, Chinese agricultural companies and Chinese farm managers often lease farmland from villagers, paying rent, and employ them as agricultural laborers.

In Namo County, the "the Chinese language bloc" is bringing new information and opportunities in areas such as cash income, education, studying abroad, and marriage. While the quantity and quality of this information and these opportunities vary among people, they exist within relationships that transcend the spatial boundaries of residential areas, nearby rural areas, and remote mountain villages. It's as if this is prompting a renewal of the "totality of connections" in Namo society. The expansion and penetration of the "the Chinese language bloc" has gone beyond the dimension of language commands such as whether or not one can speak Chinese; rather, it is intimately influencing people's consciousness, bodies, and society.

Insights gained from fieldwork in Kazakhstan

Kazakhstan studies attempt to analyze the impact of China's Belt and Road Initiative on local communities, families, and individuals in the countries involved, from multiple perspectives. In particular, research conducted over the past year or two has analyzed the impact of the presence of China and Chinese workers on Kazakhstani workers through interviews with urban construction workers. Specifically, the study focused on Kazakhstani urban construction companies where a certain number of Chinese individuals hold top management positions and where Chinese workers are employed, and interviews were conducted with the Kazakhstani workers employed there. The findings are as follows:

Firstly, the Kazakhstani urban construction workers interviewed have experience working with and interacting with Chinese workers as colleagues within their respective work teams. This significantly shapes their current views of China and Chinese people. While acknowledging negative sentiments towards Chinese people within their own country, they emphasize the high quality of materials and products sent from China, revealing that they actually have relatively strong positive feelings towards China and Chinese people.

Secondly, there is a perspective that views Chinese people without any special regard, treating them the same as other workers who come to Kazakhstan from countries such as Uzbekistan and Tajikistan seeking employment. This perspective compares views on China and Chinese people to those of other foreign workers, often referencing workplace experiences.

Thirdly, there is the view of China and Chinese people held by those with little interest in politics or little concern for political matters. Their understanding of China's Belt and Road Initiative might be limited to "having heard of it," and their perception of the Khorgos Free Zone might be limited to knowing it's a place where their family, who are middlemen, purchase Chinese products. They may also express interest in Chinese culture and even a positive attitude towards their children receiving higher education in China.

In Kazakh society, differences in views on China and Chinese people are evident, for example, between rural mining workers and urban construction workers. The diversity and contributing factors of these differences will be examined in future research.

4. 主な発表論文等（予定を含む）

2025年度に行った共同研究プロジェクトの研究課題としての成果内容についてご記載ください。

※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

【学術論文】 （著者名、論文題目、誌名、査読の有無（査読がある場合は必ず査読有りと明記してください）、巻号、頁、発行年月）＜発表予定を含む。但し、投稿中、投稿準備中のものは除く＞
<u>首藤明和</u> 「〈時間〉の〈持続〉から考える中国雲南回族ムスリムの〈共生の作法〉」『平和社会学研究会』第3号、149-168、2025年7月。
<u>首藤明和</u> 「〈中国語圏〉の拡大とラオス社会の変化——ウドムサイ県ナーモー郡の社会関係の再編から」『中央大学社会科学研究所年報』第29号、307-324、2025年9月。
（査読有） <u>首藤明和</u> 「ラオス北部における〈中国語圏〉の拡大と社会関係の再編——ウドムサイ県ナーモー郡のホーおよび中国籍漢人の事例から」『21世紀東アジア社会学』第14号、86-103、2025年12月。
<u>野宮大志郎</u> 「一帯一路政策と地域コミュニティへの影響——カザフスタン・フィールド調査と今後の課題（3）」『中央大学社会科学研究所年報』第29号、263-271、2025年9月。
<u>高井康弘</u> 「多様なエスニック・グループ出自の新旧移住者と形成途上の地域社会——ラオス北部ウドムサイ県ナーモー集住地区の事例」『中央大学社会科学研究所年報』第29号、345-363、2025年9月。
【学会発表】 （発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）
【図 書】 （著者名、出版社名、書名、刊行年）
【その他】 （知的財産権、ニュースリリース等）